O' Neill 劇における欲求と不安

—*Desire Under The Elms* の場合—

山　本　裕　実

I

Desire Under The Elms は1924年11月11日，New York の Greenwich Village 劇場に於て，Robert E. Jones の舞台装置で Provincetown players 劇団によって初演されたが，三ケ月後には，内容の不道徳を問われ，一時上演を禁じられた。その後，Boston では同じ理由で上演禁止，Los Angeles では俳優たちが捕えられるなど，様々な問題を引きおこしている。しかしながら，*Desire Under The Elms* は彼の多くの作品の中では最も優れたものの一つに数えられているのである。

それは，この作品が彼の作品系列のうち，思想的にも作劇法的にも最も円熟した時代に書かれたものであり，舞台装置と登場人物との関係が見事に調和した作品と考えられるからであろう。

彼の戯曲は，その特質や傾向から，大体，三期に分けて考えられている。*Anna Cristie* (1920)，*The Emperor Jones* (1920)，*The Hairy Ape* (1921)，*Desire Under The Elms* (1924) 等は，彼の作家生活に於ける第二期に世に紹介された。

この時期は彼の最も飛躍した時期で，第一期の作品にみられるような romantic な詩情はかげをひそめ，従来の写実主義的技法に象徴的，表現主義的な手法を加えるなど，数多くの新しい試みがなされている。

彼が America の O'Neill とも世界の O'Neill とも云われるようになったのは，まさにこの時期であった。

今回の小論では，作者の黄金時代とも云える第二期に書かれた *Desire Under The Elms* を取りあげ，この作品の舞台装置に重要な役割をしている楡の木や，演技の行われる家，と，それを囲んでいる石垣などの存在理由を解明しながら，この作品において，従来の realism 技法に symbolism が如何に巧みにおりこまれているかを考えてみたいと思う。

II

この悲劇 *Desire Unde The Elms* は19世紀後半の New England の農夫 Ephraim Cabot とその家族をめぐる物欲と愛欲との物語りである。75才の Ephraim は50年にわたる荒地開墾の労苦のために猫背になり，顔付きは石像のように無表情になってしまっている。

彼を今日まで支えてきたのは，屈強な肉体と，偏執的とも思われる程の強い信仰であった。

最初の妻は二人の息子 Simeon と Peter を生んで死に，二度目の妻は息子 Eben だけを生んで死んでしまっている。上の二人の息子たちは，老人の頑固さと，激しい仕事に堪えられず，折しも gold-rush で，西部へ西部へと人々が金鉱発見に憧れて流れて行くのにつられ，California に自由を求めて，家出してしまうのである。Eben は父親が貯めていた金貨を盗み，手切金として兄たちに与えてしまう。

丁度その頃，二ケ月も家を留守にしていた Ephraim は，肉感的な若い三度目の妻 Abbie Putman を連れて戻って来るのである。

残った息子 Eben は新しく来たまま母，Abbie を極度の憎悪感でむかえる。彼は，父が亡き母をこき使い，過労によって母は死亡し，父が彼女の畑を奪ったと思いこみ，何時かは，それを自分のものにしようと考えている。元来，その土地は彼の実母の所有であり，彼の手に返えされるのが当然だと思っているのである。故に，彼は亡き母への思慕と，父親への嫌悪感とが交錯する日々を送っている。

父親の連れて来た淫蕩な後妻 Abbie も又，過去の生活に疲れ，自由と平安とを求めて，親子程も年の違う老人と結婚し，この土地にやって来た。抜目のない Abbie は，Cabot 家の財産を自分のものにしたいために，老人をだまし，彼の子が生まれそうだと伝える。そして彼女は計画的に Eben を誘惑する。彼女を軽蔑し，憎みながらも Eben はいつしか彼女の誘惑に負け，次第に二人の関係は，愛欲へと変化していく。

Abbie の不義の子の誕生を，何も知らぬ Cabot 老人は，自分の後継者が出来たと大喜びするが，やがて，それが Eben との間に出来た子であることがわかり，激怒する。

Abbie は保身のために，Eben に誘惑されたと老人に告白し，老人は Eben に，Abbie が Eben に近づいたのは財産を手に入れる手段にすぎなかったのだと伝える。

Eben は失望と怒りのあまり，家を去ろうとするが，その頃にはすでに Abbie の心の中には Eben に対する真の愛情が芽ばえ，彼の心を引きとめておこうとして，我が子を絞殺してしまう。その事実を知らされ，一度は怒った Eben も，やがては自分も彼女を愛していた事に気付き，彼女を逮捕に来た保安官に，自分も共犯であると訴え，共に引かれていく。ここで二人は真実の愛と生活とに目覚めるのである。

III

このような財産争い，近親相姦，嬰子殺しなどの交錯する人生の醜悪な現実の断面に，作者は一体，何を見ようとしたのであろうか。

それを解明するには，この作品の悲劇の中心をどこに求めるかによって異ってくるのではあるまいか。そして，それは楡の木，石垣などが何を象徴するかという問題にも及んでくるのである。

登場人物の Ephraim, Abbie そして Eben はそれぞれの見かたによって，中心人物となり得る要素を持っており，すでに様々な説が存在している。

即ち Cabot 老人を主人公とする説① Abbie を主人公とする説②，そして Eben を主人公と考える説③ などである。

Quinn の主張しているように，この戯曲の登場人物の中で最も性格描写が巧みになされているのは Ephraim であり，他の主要人物二人にくらべると，はるかに強烈な印象を我々に与えている。

次に引用する台詞によっても Cabot が如何にこの作品の中で印象的な存在であるか理解出来よう。

> Cabot: Listen abbie. when I come here fifty odd years ago ——I was just twenty an' the strongest an' hardest ye ever seen——ten times as strong an' fifty times as hard as Eben. Waal ——this place was nothing but fields o' stones. Folks laughed when I tuk it. They couldnt know what I knowed. When ye kin make corn sprout out o' stones, Gods' livin' in yeu! They wa'n't strong enuf fur that! They reckoned God was easy. They laughed. They don't laugh no more. Some died hereabouts. Some went West an' died. They're all under ground —— fur follerin' arter an easy God. God haint easy. —— And I growed hard. —— God's hard, not easy! Gods' in the stones! Build my church on a roch —— out o' stones an' I'll be in them! That's what he meant t' Peter! —— Stones. I picked them up an' piled 'em into walls. Ye kin read the years o' my life in them walls, every day a hefted stone, climbin' over the hills up and down, fencin' in the fields that was mine, whar I'd made thin's grow out o' nothin' —— like the will o' God' like the servant o' His hand. It wa'n't easy. It was hard an' He made me hard fur it. (Part II : Scene 2)

以下，淋しくて，女房を二度もらったこと，息子が三人出来たこと，息子たちが自分に反抗すること，神様のお告げをきいて Abbie を見つけた

ことなど，数ページにわたる長台詞に彼の全貌がうかがえるのである。

しかし，性格描写が鮮かで，強い印象を与えられるからと云う理由で，彼をこの悲劇の主人公と決定するのは，性急すぎるのではなかろうか。

B. H. Clark は Abbie こそ，主人公だと主張している。つまり，過去のいかがわしい仕事から足を洗って，親子ほども年差のある老人と結婚する彼女は，何がなんでも心の平安，生活の安定を求めているのである。

自分の老後の安定のために，不義の子を生むことすらいとわない。このことによって彼女は，物欲と情欲との両面の満足を得ようとする。しかし，自分の仕掛けた落し穴にはまってしまう。

この様な展開を Clark は dramatic irony であるとしているが，他の二人にくらべると影のうすい存在に思えるのである。

最後は Eben を主人公とする考え方である。父親は，彼にとって亡き母の畑を奪った敵である。従って，彼は Abbie を父親から奪うことによって，父に亡き母の復讐を試みる。Abbie と父親の間に子供が出来れば，当然自分の所へくる筈の財産もそちらへ行ってしまうと考えたのである。

ここで O' Neill はギリシャ悲劇の母子相姦を表現主義的な形式で画き，その形式は後の作品 *Dymano* や *Mourning Becomes Electra* などにも，その例を見るのである。

彼は，兄たちにむかい

"I'm maw —— every drop o' blood!" (Part I : Scene 2)

"—— I'm her —— her heir."

"Didn't he slave maw t' death?" （同　上）

"ye've no right! She wa'nt yeur Maw! It was her farm! Didn't he steal it from her? She's dead, It's my farm." （同　上）

と訴え，自分の権利を主張している。

彼は父への憎悪と亡き母への思慕の念を忘れることができないでいる。それ故に，ここで Abbie と交りを持つことは，亡き実母に対するような

心の安らぎを得ると同時に，父親に対して亡母の復讐ができると彼は考えるのである。

Abbie と一夜を共にする時，Eben は，

"I see it! I sees why. It's her vengence on him —— so's she kin rest quiet in her grave!"

(Part II : Scene 3)

また，夜があけると，昨夜と変った男らしい顔付きになり，

"Maw's gone back t' her grave. She kin sleep now"

(Part II: Scene 2)

と述べているが，この様な征服感にも似た彼の Abbie に対する感情も，彼女に裏切られたとわかった時には，再び，亡き母への想いにかられるのである。

しかし，彼の Abbie に対する真の愛情は，彼女が保安官に連れ去られようとする瞬間に目ざめるのである。最後の場面で，二人が保安官に引きたてられ，門の前までくると丁度夜が白みはじめる。

Eben は空を指して，

"Sun's a rizin'. Purty. hain't it?"

(Part III: Scene 4)

と云うと Abbie が，"Ay-eh" と返事をし，暫く，超然とした態度で見とれている。

物欲，愛欲の葛藤，そしてその後にくる罪の意識への自覚，これらはこの悲劇を浄化し，この作品を本質的に悲劇たらしめているのであろう。従って，この作品の悲劇性を考えた場合，Eben は他の二人よりも重要だとも云える。

しかし，Eben に一貫して流れている mother complex だけを取りあげて，主題とするには戯曲全体の構成上，いささか弱い。また，Eben と Abbie の関係も，愛欲，殺人，浄化など主題にするにはふさわしいものが

揃ってはいるが，愛の理念にまでは，たかまっておらず，この二人だけで，Ephraim の存在なくしては，このような悲劇は起りえなかったであろう。故に plot としては二人のからみは重要であるが，Eben の側にたって考えるならば，彼一人では主題を進展させるには，無理があるように思える。

III

O' Neill の作品では舞台装置が非常に重要な意味を持っており，単に，その劇のために環境を与えているのみならず，芝居の進行を指示することすらあると云われている。

この作品にも彼は realism と表現主義的な手法を巧みにとり入れ，この悲劇を一層効果的にしているのである。

この作品の主人公を云々する場合，登場人物の上におおいかぶさっている楡の木や，家を取り囲んでいる石垣を忘れることは出来ない。

何故なら，すべての事件は楡の木の下で，石垣に囲まれた家の中で起るのであり，楡の木，石垣のせいでもあるからだ。

登場人物たちは各人，各様 desire を持っており，それらが達成できないが故に，悲劇が起こるのである。云いかえれば，desire という抽象的なものが主人公であり，具象化された舞台装置の上で登場人物たちを欲求不満にさせているのではなかろうか。

この悲劇の舞台構成上，最も重要な役割をなしている楡の木は，舞台の両脇にあり，それらは大きくて，枝が両側からひくく垂れさがっていて，その下にある屋根の上におおいかぶさっている。そして卜書には，

> They appear to protect and at the same time subdue. There is a sinister maternity in their aspect, a crushing, jealous absorption. They have developed from their intimate contact with the life of man in the house an appalling humanness. They

brood oppressively over the house. They are like exhausted women resing their sagging breasts and hands and hair on its roof, and when it rains their tears trickle down monotnously and rot on the shingles.

とくわしく説明されている。

このように擬人化された，楡の木は，後に述べる石垣と共に，作者の超自然主義的発想に基いているものに外ならず，この必要以上にくわしく説明されている楡の木は舞台装置上の添景的なものでなく，その下にうごめく登場人物たちの人間的な欲望を圧迫する何ものかの象徴なのであろうと考えられる。故にこの二本の楡の木は，登場人物と同じく，時には，彼ら以上にこの戯曲の進行上，重要な存在なのである。

Abbie と Eben が始めてお互いの生を意識する。或る夏のうだるような午後，彼女は Eben に向って，

"—— Hain't the sun strong an' hot? Ye kin feel it burnin' into the earth —— Nature — makin' thin's grow —— bigger 'n' bigger —— burnin' inside ye —— makin' ye want t' grow —— into somethin' else —— till ye're jined with it —— an' it's your'n —— but it owns ye' too —— an' makes ye grow bigger— like a tree —— like then elums —— Nature'll beat ye, Eben. Ye might's well own up t' it fust's last." (Part II: Scene 1)

と云うが，この場合の Abbie には楡の木の "a cruhing, jealous absorption" を感じさせる。Abibe と Eben が彼の亡き母の居間で一夜を共に過す時には楡の木は，母の亡霊の如く "sinister maternity" の様相を呈してくるのである。

このような不気味な母親気質や専有欲に似た雰囲気と相まって，Cabot 老人が，

"Even the music cant drive it out —— somethin'! Ye kin feel

it droppin' off the elums, climbin' up the roof, sneakin' down the chimmey, pokin' in the corners! They'rs no peace in houses, they's no rest livin' with folks. Somethin's always livin' with ye." (part III: Scene 1)

とつぶやき，納屋へ家畜とねるためにでかける時には，楡の木は両手，髪の毛，胸のあたりをだらりと屋根の上に垂れさげている疲れた女のように不気味な存在になるのである。

彼は，妻，土地，財産を所有することで孤独感から逃れようとdesireするが，Eben と Abbie が逮捕された為，一人農場に残ることになり，彼の孤独感から解消されたいと云うdesireは充たされない。

Eben も母の亡霊のとりこになって，彼女の所有であった農場を父から取り戻そうと desire するが，不成功に終る。

Abbie も，自由を，平安を desire してやって来たが，自ら罠にかかって挫折してしまう。

彼等の悲劇は，楡の木によって象徴される何かわけのわからぬものに振りまわされて，その誰れもがdesireを達成できず，欲求不満の状態におかれていると云う点にある。

Elm は Hebrew では strong tree と云う意味で，旧約聖書には oak とも訳され，しばしば登場してくる。故に，三人の登場人物たちの desire を，上からおさえつけ，そのどれをも達成させることを許さない程の力，厳しさを象徴するには，他のどの木よりも Elm でなければならなかったのであろう。

舞台両側に立っている楡の木が，上から彼らの desire をおしつぶそうとしているのならば，石垣は，それら desire を取り囲んで中へとじこめておこうとしていると考えられる。

The South end of the house faces front to a stone wall with a wooden gate at center opening on a country road.

と，卜書に記るされてあるが，この石垣は Part II: Scene 2 に於ける Cabot の長台詞で述べている如く，彼の50年にわたる hardship の象徴として存在している。

Cabot は荒地の中に神を見いだし，その石ころを積みあげ，石垣をつくることに生涯をかけ，息子たち，亡った二人の妻たちをもその作業に参加させたのであった。

当時の New England の頑固な Fundamentalist が信仰する神は，旧約の世界の神，Jehovah であり，その神は石垣によっても象徴されているのである。

息子たちの父親に対する嫌悪感はそのまま石垣にも通じ，それはまた，Jehovah にも通じるのである。

Peter の台詞，

> "Here —— it's stones a top o' the ground —— stones atop o' stones —— makin' stone walls —— year Eben —— makin' stone walls fur him to fences us in!

また，Eben の台詞

> "An' makin' walls till yer heart's a stone ye heft up out o' the way o' growth onto a stone wall t' wall in yer heart!"

などの中に，彼らの父親に対する呪咀や反抗の精神がうかがえるのである。

兄たちのこの叫びは，作者の封建的で，偏狭な puritanism の生活観に対する反抗でもあり，irony でもあると考えられる。

Desire Under The Elms には聖書の allusion が多くみられる。先づ，登場人物たちの名前がそうであるが，これら Simeon, Peter や Ephraim などの名前の持つ意味が実際の彼らの行動と相反している点にも作者の意図がうかがえ，非常に興味深い。

聖書からの引用が台詞の中に八ケ所もあるが，19世紀半ばの New Eng-

land に於ては日常生活の中に，日常会話の中に，宗教の，そして，聖書の占める範囲が非常に大であったと考えればうなづけるのである。しかし，登場人物たちの思想，行動，芝居の plot の進展などを考えてみると，このような Bible の扱い方にも石垣と同様，彼の puritanism に対する irony がうかがえるのである。

IV

三部十二場を通して，舞台装置は変化しない。つまり，舞台両側の楡の木，前面の上手から下手に舞台を横切っている石垣，その横と縦の線でがっちりと取り囲まれている中央に Cabot 家が建っている。

二階の老人と，兄弟たちの寝室，階下の客間と台所が各場の必要に応じて，その中の一室，又は二室，或いは屋外が使用される。

ト書には，

> The end wall facing us has two windows in its upper story, two larger ones on the floors below. The two upper are those of the father's bedroom and that of the brothers. On the left, ground floor, is the kitchen — on the right, the parlar, the shades of which are alway drawn down.——

とあるが，O'Neill の co-manager であった，Robert E. Jones は，階上，階下の四室を同時に観客に見えるように組立て，内部での演技，殊に心理的な動きなどが一目でわかるようにした。この画期的な実験は，芝居をより一層効果的にしたのである。

V

Desire Under The Elms には，梗概だけを知るならば，喧嘩あり，財産争いあり，義理の間とは云え，母子相姦や嬰子殺しと低俗な，どたばた芝居に用いられ易い素材が多く含まれている。

しかし，O'Neill は desire と云う抽象的な問題に，写実性と象徴性とを巧みにからませてこれら安易に考えられがちな素材を美しい劇場詩に創り上げている。

この Story の背景になっている時代，各場の時間的な設定及び登場人物たちの相互関係（この相互関係にはギリシャ悲劇的な要素と Freud の心理分析との融合がみられる）などの象徴が，舞台上に設置されている写実的な楡の木，実物で造られた石垣などのもつ重要な意味と巧みに調和されている。

この事実は彼が優れた劇作家であったと共に優れた舞台人でもあったことを明白に示しているのである。

Notes

1. A. H. Ouinn: *A History of American Drama* Vol. II p. 189
2. B. H. Clark: *Eugene O'Neill the man and his Play* p. 152
3. R. D. Skinner: *Eugene O'Neill, A Poet Quest*

Bibliographies

1. A. S. Downer: *Fifty Years of American Drama,* Regenery, 1951.
2. J. Y. Miller: *American Dramatic Litrature,* Mc Graw-Hill Book Co. Inc., N. Y.
3. J. Y. Miller: *Eugene O' Neill and the American Critic,* Archon Books, 1962
4. J. Y. Miller: *O'Neill & the critics. Scot,* Fovesman & Co., Chicago. 1965
5. E. A. Engel: *The Hunted Heroes of Eugene O'Neill,* Harvard Univ. Press, Cambridge, 1953
6. A. H. Quinn: *A History of the American Drama* Vol III. F. S. Crofts Co. N.Y., 1945
7. J. Gassner: *Masters of the Drama,* Randon House, N.Y., 1940

8. B. H. Clark: *Eugene O'Neill, the Man & his Plays*, Dover, 1947
9. A & B. Gelb: *O'Neill*, Harper, 1960
10. S. K. Winther: *Eugene O'Neill, A Critical Study*, Russell & Russell, 1961
11. R. D. Skinner: *Eugene O'Neill, A Poets' Quest*, Longmans, Green, 1935
12. 高垣松雄：*Introduction to Bound East for Cardiff, The Emperor Jones, etc.* by Eugene O'Neill　研究社：英米文学叢書，1932
13. 山内邦臣：『ユージン・オニール研究』山口書店，1964
14. 木村俊夫：『ユージン・オニール』灯書房，1953